

巻頭言

保育学の林に立つ美しい木々

津守 眞

この半世紀に日本の保育学の土壌に育った数々の書物は、私には林に立つ美しい木々のように見える。最近相次いで出版された三冊の書物を読んでそう思った。その一冊は三宅和夫・陳省仁・氏家達夫著『「個の理解」をめざす発達研究』(有斐閣、二〇〇四)、他の一冊は榎沢良彦著『生きられる保育空間―子どもと保育者の空間体験の解明―』(学文社、二〇〇四)である。前者は科学的児童研究であり、後者は現象学的実践研究である。もう一冊は国吉栄著『日本幼稚園史序説―関信三と近代日本の黎明』(新読書社、二〇〇五)で、幼稚園の源流を尋ねる歴史研究である。

第一。ひとりの子どもがどのように成長発達するのかを実証科学の方法を用いて行う児童





研究は、一九世紀末にスタンレー・ホールに始まり現在に至るまで、米国において著しい進歩を遂げ、日本のみでなく世界に大きな力をもった。三宅は私と同年代の発達心理学者で、同一の子どもを長期にわたって研究する縦断研究に専念してこられた。著者は最近二、三〇年は、実証的心理学の手法による日米共同研究の一端をも担われたが、日本の子どもを考へる時、われわれ自身のバックグラウンドである社会、文化、時代的情況を考へねばならないと言う。この書物では、自己の歩みを振り返りつつ、二十世紀後半の縦断研究の成果について正直に記している。「研究者は個人と同じように発達する。研究もまた発達する。」役に立つという基準は時代とともに変化する」「日本の子どもや家庭や学校の抱えている解決を迫られているような問題に目を向けること」なしには先を進められないなど、生涯を縦断研究に費やされた著者の貴重な見解が記される。後半、若い研究者の執筆による「共同注視」の章は神経学的実験研究であるが、乳児が見つめるものに大人が関心を寄せるとき、それは感動となつて乳児の心に残るといふ私共の保育体験につながる。発達はず子どもと大人との共同作業である。

第二。著者榎沢は、現象学の考へ方に立ち、自ら保育の実践にかかわり、保育者と子どもとの共同の営みとして展開する保育の探求をこの本の課題とする。フツサルによつて始められた現象学が、ランゲフェルトらによつて教育の分野に取り入れられたのは、二十世紀半ばである。子ども不在の実証的心理学に対抗して、子どもの人間学を主張して闘つてきたも



うひとつの児童研究運動である。榎沢の書物は、現象学を消化して書かれた本格的な保育理論の書物である。人為的な実験場面ではなく、日常生活場面で主体的に動く子どもと保育者とが、空間をどのように体験し、どのように意味づけるかが重要なのだと著者は言う。日本の保育には、常識として当然と考えられていることがあまりにも多い。無心になって直接子どもに触れて考えるならば別の世界が見えてくるはずである。榎沢は幼稚園や保育園での具体的な保育場面を丁寧に解きほぐす。その方法は、「理念や観念の衣を脱いで、根源的な生活世界の経験へと還る」現象学的還元（反省）である。巻末に現象学の用語解説が加えられている。日本人は現象学的思考法が伝統的に馴染んでいると西洋の現象学者たちは言うが、それを意識して自己研修を積み重ねれば常識と因習的伝統に墮してしまう危険を孕んでいる。ここでもフツサルから数えると一三〇年の歴史を経ている。

第三。国吉栄著『日本幼稚園序説―関信三と近代日本の黎明』。この本の主題である関信三は、日本で最初の幼稚園を創った人として知られているが、一八七六年という幕末明治の動乱期になぜ幼稚園だったのか、次々に疑問が湧いてくる。破邪顕正運動、太政官者、英国留学し、帰国して幼稚園長となり、フレールベルに関する諸著作を翻訳する。表面の履歴だけでは分からない内心に何が起こっていたのか、著者はそれらの疑問をひとつひとつ原典に当たって解いてゆく。そして明治初期の日本の精神史にまで迫ろうとする。「寡黙であったが彼自身が、謎に満ちた保育史の迷宮を解く私の手引き者となって、予想もしなかった眺望を



開いてくれた」と著者は言う。常識的解釈を排し、本当のところを探ろうとする態度は、現在の保育を考えるとき、至る所で求められている。近代日本の黎明と副題がつけられているが、近代日本とはいつのことなのか、既に来ているのか、これから来るのか。動乱の二十一世紀の幕開けを生きたことになった私も、考え込んでしまう。東洋と西洋のはざまに立つ日本、アジアの中にある日本、諸宗教の間にある日本、スピリチュアルな面を抜きにしては考えられないだろう。激しい変化の時代にあつて個人のアイデンティティーはどこに求められるのか。

幼児と毎日を過ごす保育者にとっては、話は案外簡単かもしれない。どんな動乱の時代にも私共が子どもを信頼しさえすれば、子どもは惜しみなく大人を信頼する。保育者はそういう世界に住んでいる。今日、そういう世界を自分たちのまわりにつくることができるのだから保育者は幸いである。

保育研究の歴史には、その中の研究者たちのそれぞれの人生がある。いずれもが新たな芽を吹き、新しい樹木が育つてゆく。ここには、最近ばかりでも相次いで手にした書物について書いたが、これらがシンボリックに保育という人間の育つ土壌をあらわしている。他の多くの美しい木々を思いつつ、私もその列に加わって歩き続けたい。

(保育研究者)